
[成果情報名] トマト黄化葉巻病抵抗性品種「TY桃太郎さくら」に適した台木品種「スパイク」

[要約] 促成トマト新品種でトマト黄化葉巻病抵抗性の「TY桃太郎さくら」は、台木品種として「スパイク」を用いることにより、厳寒期の生育および収量性が優れる。

[キーワード] トマト、トマト黄化葉巻病、台木、品種、収量

[担当部署] 野菜栽培部・野菜栽培チーム

[連絡先] 092-922-4364

[対象作物] 野菜

[専門項目] 品種選定

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

本県産トマトブランド「博多のトマト」では、難防除病害であるトマト黄化葉巻病に抵抗性を有する穂木品種の導入が求められており、有望品種として「TY桃太郎さくら」を選定し（平成20年度成果情報）、その導入が進みつつある。しかし、「TY桃太郎さくら」は厳寒期の草勢がやや弱く、小玉傾向となることが課題である。

そこで、厳寒期の生育および収量性に優れる「TY桃太郎さくら」に適した台木品種を選定する。
(要望機関名：八女普 (H20))

[成果の内容・特徴]

1. 「TY桃太郎さくら」の厳寒期に開花する7段および8段果房直下の莖径は、台木品種「スパイク」が草勢が中庸である対照台木品種「がんばる根」に比べて太く、草勢が維持される。一方、第1果房着果節位、主莖長および開花日は、台木品種間で差はない（表1）。
2. 平均1果重は、着果負担がかかった後、厳寒期に果実が肥大する3、4段果房および合計ともに、「スパイク」が「がんばる根」に比べて重い（表2）。
3. 商品果収量は、3、4段果房および合計ともに、「スパイク」が「がんばる根」に比べて多い（表2）。
4. 糖度、商品果率および不良果発生率は台木品種間で差はない（表2、一部データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「TY桃太郎さくら」の促成トマト栽培用台木として活用する。
2. 「スパイク」は、萎ちょう病（R-1、R-2）、根腐萎ちょう病、半身萎ちょう病、サツマイモネコブセンチュウ、TMV（Tm-2型）に抵抗性、青枯病、褐色根腐病に耐病性を持つ。

[具体的データ]

表1 台木の違いと「TY桃太郎さくら」の生育（平成20年）

台木	第1果房着果 節位 節	主茎長 cm	果房直下茎径 mm			開花日		
			2段	7段	8段	2段	7段	8段
スパイク	10.9	274	14.5	10.2a	10.1a	12月3日	2月7日	2月22日
影武者	10.5	274	14.0	9.8ab	9.3b	12月2日	2月8日	2月21日
ブロック	10.6	278	13.9	9.9ab	9.2b	12月3日	2月10日	2月24日
がんばる根（対照）	10.7	273	14.4	9.3b	9.1b	12月2日	2月8日	2月23日
分散分析	ns	ns	ns	*	*	ns	ns	ns

注) 1. 定植：平成20年10月29日、栽植密度：2,116株/10a、土性：砂壤土、施肥：OKF-1、2000倍液によるかん水同時施肥栽培
 2. かん水量（mL/株/日）：11/11～11/30；150mL、12/1～1/8；300mL、1/9～2/20；150mL、2/21～3/15；300mL、以降750mL
 3. 最低温度：8℃、収穫段数：8段（摘心時期：3月上旬）
 4. 主茎長、果房直下茎径は収穫終了時の測定値
 5. 分散分析の*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし。異英文字間に5%水準で有意差あり（Tukey法）

表2 台木の違いと「TY桃太郎さくら」の収量および品質（平成20年）

台木	商品果収量		平均1果重		商品果率 %	糖度 B r i x %
	合計 t/10a	3, 4段	合計 g	3, 4段		
スパイク	8.9a	1.9a	164a	131a	94	6.1
影武者	8.0b	1.8a	163a	125ab	86	6.1
ブロック	7.9b	1.4b	162a	112ab	86	6.4
がんばる根（対照）	7.3b	1.5b	142b	106b	87	6.6
分散分析	*	*	*	*	ns	ns

注) 1. 耕種概要は表1と同様
 2. 分散分析の*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし。異英文字間に5%水準で有意差あり（Tukey法）

[その他]

研究課題名：促成トマト新品種に適した台木品種の選定

予算区分：経常

研究期間：平成20年度（平成20年～21年）

研究担当者：井手 治、國武みどり、龍 勝利、小熊光輝、奥 幸一郎